

社会福祉法人・学校法人 イエス団



イエス団報

Jesus band news

2020/12/24

24

再刊 24 号

- 研修報告
- 施設紹介
天使保育園・天使ベビーセンター
宇山光の子保育園
- トピックス
二宮保育園の今
真愛あらたホーム
- J.B.フェローズ活動報告
- 賀川豊彦献身110年記念イエス団大集会
- イエス団の輪っ
平田 義さん
南 美穂子さん 小川智子さん
山田千冬さん 宮内未来さん
- 表紙写真の解説
- 編集後記

発行：2020年12月24日
発行者：黒田 道郎
編集・発行：
社会福祉法人・学校法人 イエス団
〒651-0076
兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20
TEL：078-221-9565
FAX：078-221-9566
<https://jesusband.jp>
mail to : honbu@jesusband.jp



わたしたちは、いのちが大切にされる
社会をつくりだす
わたしたちは、隣り人と共に生きる
社会をつくりだす
わたしたちは、違いを認め合える
社会をつくりだす
わたしたちは、自然が大切にされる
社会をつくりだす
わたしたちは、平和をつくりだす

2009年12月24日

研修会報告

新任職員研修フォローアップセッション

2020年11月7日(土)

於：賀川記念館

オンライン・オンデマンドは各施設

3月に予定していた新任研修。新型コロナウイルス感染拡大を受け、1泊研修は中止に。「さあ、がんばるぞ」という思いで、それぞれの施設で勤め始めてすぐの2020年4月7日(火)に政府から緊急事態宣言が出されました。各施設でもコロナ対策を考えられ、普段とは違う生活が始まりました。何が何だかわからないまま、このような時期を過ごしたであろう新任のみなさまのことがずっと気になっていました。なんとか1日研修だけでも、そしてできるだけ顔を合わせて、と研修を企画しました。

会場、オンライン、オンデマンドと3つの方法で参加をする研修はイエス団ではじめてです。会場には緊張した面持ちの参加者がいて、半年たったとはいえ、やはり新任研修だなと感じました。そして少し苦戦しましたが、オンラインの参加者とも無事につながり研修が始まりました。



開会礼拝では黒田道郎理事長より「愛」についてメッセージをいただきました。「愛するとは大切にすること」という理事長の言葉がみんなの中にずっと入っていったようです。

礼拝後にグループになり、「イエス団で働いている」ということをシートに記入しながら個人でまず考えました。

グループで出てきた話を聞きながら、意識していなかったことが少し明確になったようです。仲間の考えや意見を聞いた後に、スタッフの田村三佳子さんから、「イエス団らしい働き」、平田義さんから「社会をつくりだす」ということについての話がありました。私たち一人ひとりが神さまから愛されているかけがえのない存在であり、自分を大切にすることが神さまによるこぼれること。本当に困っている人にどの

ように寄り添うのか。イエスに倣って生きるとは。そしてどのような社会をつくりだすのか。人の痛みを分かち合う、その人のしんどさをキャッチすることが大切、という話をきいて、自分の仕事のことに結びついていったようです。



講師の川中大輔さんは、参加者の考えがまとまっていくよう、話を整理してくださり、導いてくださいました。

最後に半年の歩みを振り返りながら私のミッションステートメントを考え、発表しました。すでに毎日、利用者と共に過ごしているみなさんが、気持ちも新たに決意した顔はとても頼もしいと感じ、一緒に働けることに喜びを感じました。



いままで1泊でしてきた内容をぎゅっと集めて行いましたが、もっと話をしたかった、他にも、という思いもあったと思います。

4時間という短い時間ではありましたが、とても充実していました。

参加者から研修後に「目指したい

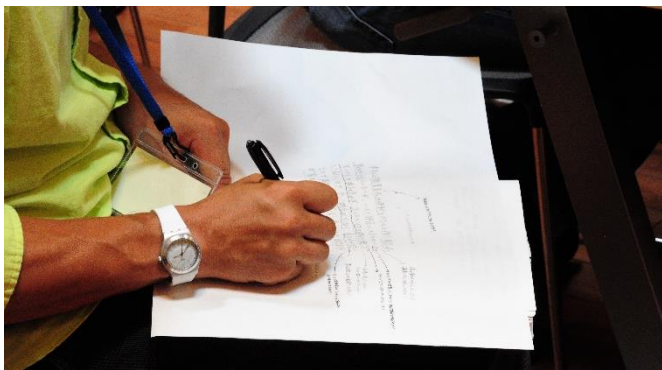
ことが明確になった」「半年過ごしたことを振り返る機会となった」「たくさんの人の話が聞けて考える機会になった」というような感想をいただきました。法人にはたくさんの仲間がいることを感じられたのではないのでしょうか。これからも仲間と共に、みなさんが考えたミッションを達成し、それぞれの施設で出会う人を大切にしながら活躍されることを願っています。

報告：企画委員会 研修チーム
神視保育園 園長 植月優子

リーダーシップ養成研修ステップⅡ 第2期修了

第1回リーダーシップ養成研修ステップⅡは、2014年度から16年度の3年をかけて行いました。第2回研修については、その内容をさらにブラッシュアップし、1年に集約して行いました。2020年4月18日に予定していた修了式は、コロナウィルス感染防止のため中止となりましたが、1年かけて大きく8つの分野をこなしてもらいました。

その中の大きな柱が“アクションプラン”です。アクションプランは①、②、③と分かれ、課題発見から分析、アクションプランの作成、そして実践から評価までつながるレッスンです。しかも架空のプランを作るのではなく、それぞれが働く現場における課題を抽出し、その解決を図るために（実際に課題解決を目指し、実践します）作成され、実践されるアクションプランです。



このアクションプランは、自分自身とのワーク、振り返り、講師の方の講義、諸先輩のアドバイス、そして仲間との話し合いを続けて完成されます。実際に実践して、評価して、さらにプランを立て、また実践し、評価し、その形を継続して課題解決に結びつけていきます。現場の課題であるからこそ、自分自身に返ってくる内容であり、ワークをしながら作り上げていくことはとてもしんどい作業なのです。この作業を通して、自分の役割を知り、誰と協力し、誰と話し合い、どの部分に重きをおいてなされていくべきかを考えていきます。まさしく実践演習であり、自分自身が最も成長できるレッスンだと言えると思います。

感情的になってしまう時もありました。仲間と話すことで大きな示唆を受けた場面もあったと思います。今回参加された12名のみなさんが仲間のことを知り、自分自身を語り、互いに影響し合いながら、作り上げていったものだと言信しています。



全体の研修内容は、それぞれがまだ理解していない分野も含め、ある意味で“とっかかり”かもしれません。でもいつか「ああ、あの時、わからないなりに聴いていたことがこれか」と思い出すことがあると思います。さらにアクションプランで経験した内容は、これからの仕事に絶対に役立つものだと思います。それは自分一人ではなく、協力者と共に組織を変えていくこと、そして自分自身が変わっていかねばならないこと学ぶことからです。



ステップⅡ研修を始める時に毎回お話しているのは、施設でリーダーシップをとり、法人でもリーダーシップをとってほしい人財の発掘と養成という目的です。

私たちは第1回、第2回のステップⅡ研修を修了し、巣立っていったみなさんが力をつけ、イエス団のリーダーとして活躍されることを想い描いています。

ぜひ、いつも前を向き、遠くを見つめて仕事をしてほしいと思います。私たちがなしとげられなかったことを、ぜひなしとげてほしいと願いつつ。

報告：研修委員会 委員長
二宮保育園 園長 馬場一郎



2019年度 イエス団・本所賀川記念館・雲柱社、合同施設長研修開催

2020年1月24日（金）～25日（土）

於：ルポール麹町

2年に一度、東京と関西で交互に開催しています合同施設長研修を開催いたしました。イエス団からは18名が出席しました。今となつては、新型コロナウイルスの影響を大きく受けた1年でしたが、まだ、忍び寄ってくる感染という状況だったのかと振り返ります。

この研修は、創立者を同じくする三法人が時宜に適ったテーマで研修の場を継続しています。特に今回は変化する社会福祉法人のあり方をふまえ、これからの事業の展開、管理職の担うべき課題、人財育成と課題、地域との関わりなど、山積する問題に法人としてどのように対応していくのか、課題に対してどのように個々の施設が取り組むのかを、創立者の思いや実践、ミッションに立ち返り、学ぶことを目的としました。

講演では、公益財団法人賀川事業団雲柱社の前理事長・前館長の加山久夫先生より、「賀川豊彦の遺産を現代に継承する」と題して、歴史や時代を追う中で、私たちの理念・使命の源流について学び、どのような立ち位置から私たちの事業を捉えるのかという示唆をいただきました。また、「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10:15）を引用され、それぞれの法人の進むべき方向や、これからの事業展開について社会資源の活用や関連団体との連携や協力についても提言をいただきました。

また、2日目の全体会では、「各法人の課題と今後の展開」～直面している問題・取組・事業展開・人材開発など～と題して三法人の展望について意見が交わされました。それぞれの法人において固有の課題があり、取り組みを行っていること、また、人財の育成や確保、コンプライアンス、ガバナンスに代表されるような組織運営に関することなどにおいては、共通する課題があり、ミッションに立ち返り、社会や地域の状況を踏まえた対応・課題解決がそれぞれの法人に求められていることが発表され、課題に対して向き合っていくことやそれぞれの法人の取り組みから、ヒントを得ることが出来たと思います。

限られた時間の中で、三法人に連なる施設長が一堂に会し、学びを共にし、課題を共有することが出来た研修となりました。また、交流と協議の中でこれからの施設・事業のあり方や法人の運営についても示唆の多い機会となりました。お世話いただきました雲柱社、本所賀川記念館の皆様にご感謝いたします。

報告者

イエス団本部事務局長 小野昌二



「研修に思う」～2020年度を振り返って～

今年は、新型コロナウイルスの蔓延により、準備していた新任研修会を断念せざるを得なくなりました。ブラッシュアップ研修も、リーダーシップ研修Ⅰも全て中止にするしかありませんでした。そのような中、皆さまはどのように過ごされたのでしょうか。

新任は緊張状態のまま入職し、新しい生活が始まりました。本来なら新人歓迎会、行事の打ち上げ等、研修だけでなくリラックスできる場が設けられたであろうところ、一切ないままに7ヶ月が過ぎました。その新任を支える施設職員の皆さまも恐らく目まぐるしい日々を過ごされたことと思います。今ほど研修の大切さを感じたことはありません。

学ぶことが、自身と向き合うこと。自分の中にあるものだけでは到底対応しきれないことのいかに多いことに気づきます。また人と顔を合わせて語ることがどれほど支えになることか。悩んでいるのは自分だけではないことに気づき、また明日から頑張ろうと思える瞬間。

この連続でわたしたちは成長するのですものね。

研修も何もないままに始まった新任にとっては「これで本当にいいのか」と不安で仕方のない日々だったことと思います。そういう意味でもここにフォローアップセッションを行うことができたのは感謝でした。

元気で過ごしておられることを願いながらスタッフ一同この日を迎えました。本来なら行っていたであろうブラッシュアップ研修やリーダーシップ研修対象の顔を合わせるもののなかった皆さまのことを思いながら、この一つの研修に心を注いでおりました。

イエス団には共に頑張っている素敵な仲間がいます。その一人ひとりがイエス団の宝です。顔を合わせて行うことが難しいなら、オンラインでも。わたしたちは繋がっているということを実感していただければと思います。

コロナには負けない。きっと新しい形の研修を企画しようと考えています。

抜けないトンネルはない。必ず明るい明日は来るのだと信じてこれからも一緒に歩んでいきましょう。傍にはイエスさまがいてくださいますものね。

研修で言えなかったこと「わたしも皆さまのこと大好きだよ」

企画委員会 研修担当チーム チーフ
甲子園二葉幼稚園 園長 田村三佳子



施設紹介

天使保育園・天使ベビーセンター

データ

〒554-0022 大阪市此花区春日出中 1-15-13

電話 06-6361-3713 FAX 06-6462-1072

「新園舎スタート」



天使保育園 天使ベビーセンターの新園舎

2園目となる天使ベビーセンターの新園舎が11月に無事完成いたしました。1年前に完成した天使保育園とつながったときは、青函トンネルが開通した時のような喜びに溢れました。

此花の地で四貫島セツルメント（地域福祉事業）として始まって96年、先代の小川居園長から引き継いで15年が経過したこの年に、築50年の旧園舎の建て替えという歴史的な一ページに立ち会えたことも、ひとえに先達と神さまが用意してくださった道筋であり、関係者の支えがあって成しえたことと心から感謝いたします。



歴史ある旧園舎

振り返ると大変なことも多かったですが、この上ない経験をさせてもらいました。職員忘年会で重大発表として建て替え計画を発表したことから始まり、暁明館病院の跡地を貸してもらえることになり一気に計画が動き出したかと思いきや、大阪市の建て替え審査で保留となり一時計画がストップしました。設計事務所と金額設定が折り合わず話し合いが難航し、仮設園舎の建設はいついつになったら始まるのか、不安になるほど工期は遅れました。



楽しかった旧園舎

出来上がった仮設園舎は、夏は暑く冬は寒く、雨にはめっぽう弱く。いざ天使保育園の解体工事が始まると、電話の音が聞こえないほどの騒音で、近隣住宅には何度も頭を下げに行き、地響きに怯えながら保育をした時期もありました。すったもんだありましたが、子どもたちと愛着のあった旧園舎が目の前で解体されていく工程を、一緒に見ながら過ごせたことは良い思い出となりました。

引っ越し作業は計6回も行いましたが、毎回職員のマンパワーに助けられ天使の底力を感じました。



新園舎屋上から中庭を臨む

竣工式はコロナの影響で式典は行わず、内覧会としましたが、関係者の皆様に喜んでいただき、多くの方々に支えられていることが実感できる一日となりました。

いよいよ新園舎での保育がスタートいたします。職員一同力を合わせて仕事に励みたいと思っています。作家の三浦綾子さんは「仕事とは仕えること。働くとは人のために動くこと。」と表現しています。私も若いころはがむしゃらに仕事をしていた頃もありましたが、振り返るとそれは自分の為に頑張っていただけで、人に仕えるという意識はなかったことに年を重ねて気付かされました。

私たちは此花区の子どもたちの将来に対して責任があります。そのことは先代の小川居園長が創立50周年の記念誌で強く訴えていた想いでもあります。新園舎を有効活用してこれからの50年、職員一同力を合わせて心新たに子どもたちのために新しいスタートを切りたいと思います。

園長 嶋田良介

施設紹介

宇山光の子保育園

データ

〒573-1136 大阪府枚方市宇山東町 8-30

TEL : 072-851-0560 FAX : 072-851-1962



「宇山光の子保育園」は、1976年に「枚方市立宇山保育所」として開所し、2004年にイエス団に民営移管され16年が経ちました。枚方市として最初の民営移管となったため、当初、様々な問題が発生しました。市民・保護者からの民営化への反対運動、そして裁判…。解決すべき課題で追われる毎日でした。裁判後も、保護者からは「今まで通り（公立で運営されていた保育内容そのまま）に保育するように」との声があがりました。私立の保育内容は、公立に比べレベルが低いとの見解です。「今までは〇〇だった」「今までと違う」と、保護者からの批判に対応する毎日でした。勿論、宗教色はNGです。私たちの保育の中心である『キリスト教精神・キリスト教保育』を表面化することは決してできませんでした。民営化され5年が過ぎたころに、お便りに讃美歌・お祈りを行うことを記載したところ、すぐに反対の声が上がリ、断念したこともありました。



それでも、10年が過ぎた頃から、保護者の方々に“キリスト教保育を行う”ことを少しずつ伝えてきました。また、職員の勉強会も続けて行ってきました。キリスト教的な行事を行うことがキリスト教保育のすべてではなく、保育士の一人ひとりの子どもたちへのまなざし、認め合う関係、赦し合う心が大切だと学びました。宗教色を表面化させることができないからこそ、「キリスト教保育って何」と悩み、考えました。それでも職員の願いは、宇山光の子保育園で、ページェントを行うことでした。12月の音楽会では、保護者の方も一緒に、「クリスマスってなあに」の絵本を見ていただくようになり、入園説明会や保護者会の中で、キリスト教保育

を行っていくこと等を伝えていきました。

2018年度からは、月のお便りに‘聖句’‘聖句から学ぶ思い’を載せて、キリスト教への理解を求めていきました。また、お誕生日会では、子どもたちに向けて、お話も始めました。月の讃美歌、お誕生日会のお話の要約を玄関に掲示したり、誕生児に祝福のお祈りをするようになり、そうして、2019年12月、宇山光の子保育園で『初めてのページェント』を行いました。



この『初めてのページェント』も、スムーズに行えたわけではありませんでした。年



長組の保護者の方には、取り組みの様子などをクラス懇談会で伝えることが出来たのですが、他のクラスの保護者の方には伝えきれないところがあり、無理やりさせられているのでは、との声があがりました。特に、「自由な遊び」「主体的な活動」を掲げてきたことに反しているのではと指摘されました。そこで、年明けに『ページェントだより』を発行し、取り組みへの思い、取り組む子どもたちの様子などを紹介し、理解を求めました。

ページェントはキリスト教の布教のためではなく、もちろん信仰の強制でもありません。私たちがキリスト教保育を通じて子どもたちに伝えたい思いは、平和を守ること、人を愛すること、自然と共に生きること。私たち保育者が子どもたちの命を尊重する保育です。

（『ページェントだより』より一部紹介）

共感して下さる方、宗教色に反感のある方、難しさを感じました。それでも、子どもたちのページェントに感動してコメントを下された保護者の方もありました。何よりも、一緒に取り組んだ職員が、キリスト教保育について多くのことを学び、感じる事ができました。

すべての保護者の方が賛同して下さっているわけではありません。今年の年長組の保護者からも、「キリスト教でなくても愛は伝えられる」と言われたりしました。それでも理解を求めながら、子どもの様子を伝えながら、今年もクリスマスに『ページェント』を行います。

昨年に戻して、2019年『ページェント』の取り組みの様子を、ご紹介します。

クリスマスのお話については、以前から紙芝居を使って行っており、2018年からは、“アドベント”を子ども



たちと一緒に守ることにしました。アドベントでは、陶器の人形（ネイティビティ：聖誕シーンのジオラマ）を使って、分かりやすく、親しみやすく、クリスマスのお話をしました。そして、2019年、いよいよページェントを行うこととなり、ページェントを知らない子どもたちに、ページェントを伝え、

一緒にページェントをつくっていきました。

11月6日(水)、絵本「クリスマス〜かみさまのおおきなプレゼント〜」から、クリスマスのお話をしました。そして、このクリスマスのお話を劇で行ってほしいこと、『ページェント』を通して、世界中の人に幸せを届けてほしいことを伝えました。不思議なことに、子どもたちはごく自然に、当たり前のように、「いいよ」と了解してくれました。そこで、次に他園のページェントのビデオを借りて、みんなで観ることにしました。「お〜」と声を上げたり、少しドキドキ、ワクワクしている様子でした。

11月19日(火)、収穫感謝の集いが終わると、紙の人形を使って、クリスマスのお話を行いました。

31体の人形(子どもたちの数の人形)を、テーブルの上(舞台)に並べてお話を進めました。3日間、同じようにして進めると、子どもたちは、セリフや歌を覚え始めました。



その後、紙の人形はクラスの子どもたちにプレゼントしました。(自由遊びの中でも、人形で遊んだり、オブジェのように



に飾ったり、楽しんでいました。簡単な作りなので、すぐに壊れたり無くなったりするのかなと思っていましたが、『ページェント』の本番が終わっても、1つとして欠けることなくありました。楽しみながらも、自分たちの分身のように、大切にしているようでした。)

11月22日(金)、初めて舞台上に立って、『ページェント』をしました。それぞれの役は、子どもたちが決めました。初めてですが、人形でお話を進めていたのとまったく同じ動きだったので、スムーズに進みました。あまりのスムーズさに、びっくりです。セリフや歌を覚えていなくても、みんなで歌ったり、みんなでセリフを言いました。2回目、3回目の『ページェント』は、役を交代しながら行いました。色々な役を体験してみたい子、「絶対〇〇がいい!」と心に決めている子、それぞれでした。31人分のセリフ・歌詞カードを用意しました。(カードは、子どもたちが役を交代しても、どの子がどのセリフなのか、担任がわかるように用意したのですが、子どもたちのお気に入りになりました。)

11月27日(水)、いよいよ、役決めをしました。ここからは、交代がありません。みんなで相談しました。相談して、相談して決めたので、そこからは自分の役を大切にしながら『ページェント』しました。たくさんの小道具を、他のクラスの先生たちが作ってくれ、天使のリング、星の精の小道具、博士の望遠鏡と本と冠、宿屋セット、どんどん揃っていきました。また、衣装の製作も進んでいきました。保育園中の先生が、年長組の子どもたちの『ページェント』に携わっています。子どもたちは、「ありがとう」と嬉しそうに、ページェントを行っています。

11月29日(金)、ページェントリハーサルです。

この日は、衣装は間に合いませんでしたが、年中組の子どもたちが見に来てくれました。今までのリラックスムードが一変し、子どもたちにスイッチが入ったのがわかりました。また、子どもたち自身が、「できる」と自信がついたようにも見えました。



この年の子どもたちは、年中組のときから、まとまらない、一斉での活動ができない、ケンカばかり、保育室を飛び出していく…。保護者から『怪獣』と言われ、「どうなるの?」と、心配されてきた子どもたちでした。年長になってから、クラス担任は、まずは個々の気持ちを受け止めることを第一とし、やりたいことを見つけ、とことん遊ぶ保育を行いました。トラブルは、毎日のようにありましたが、もともと考える力がある子どもたちでした。2学期になると落ち着いて活動するようになっていきました。

この子どもたちと、初めての『ページェント』を行いたい。この子たちこそが、第1回の『ページェント』を行う子どもたち。そんな思いがあつてのスタートでした。子どもたちと、クラスの職員と、そのほか他の職員も、一日一日が神さまの恵みでした。

そして当日、神さまに愛され輝く子どもたちの姿が、大勢の方の前にありました。



今年、第2回の『ページェント』が終わると、保育園の建て替え工事が始まります。これからも、神さまの導きの中で、子どもたちと、保護者の方と、地域の方と、一緒になって、共に歩んでいきたいと思います。

園長・谷口浩美

トピックス(新しい施設の紹介)

二宮保育園の「今」



2019年4月から民間移管を受けて始まった「社会福祉法人イエス団二宮保育園」は1年を終え、2年目の後半に入っています。公立の保育所をそっくり引き受けてやることは想像以上に難しいものでした。継続した子どもたち、保護者は皆さん公立がいいと思って入園された方々です。民間が引き受けることに多少なりとも不安や心配、どちらかというとマイナスのイメージをもっていたのではないかと思います。

建物が竣工した後、3月後半に、公立の二宮保育所の子どもたちを新しい園に招く機会を何度か作り、保護者の皆さんにも事前に来てもらうオープンデイを設定しました。その時にそれぞれのクラスで重要事項説明を行い、十分に理解してもらうように努めました。また近隣の方々に対しても別日にオープンデイを作り、見学会を実施しました。その際、何人かの方に車の登園だけは絶対させないで、という声も聴かせていただきました（園の前の道が車1台くらいしか通れない狭い道で、これまでいろいろとトラブルがあったそうです）。そのように対保護者、対近隣という（対立しているわけではないですが）意味では、できるだけの対応をして開園にこぎつけたという印象です。



4月から新しい園舎で、新しい事業主（イエス団）の保育が始まりました。私たち職員もそうでしたが、保護者の皆さんは本当に手探りだったのではないのでしょうか。私はできるだけ、登園時間に門に立ち、子どもたちと保護者の受け入れを行いました。その中で近隣の方たちとも挨拶を交わし、顔見知りになることができました。5月に“親子で遊ぼう”

という保護者参加の行事を行い、年長組の田植えやキャンプそして秋の運動会と保護者の保育参加と懇談を経て、ようやく保護者の皆さんの顔が変わっていったように感じました。私たちの保育園に信頼を寄せてくださり、“よろしくお願いします”という感じが伝わってきました。



2019年度末から今9月まで、コロナウイルスの感染予防と感染に対する不安、保護者への説明や理解を求めること、保育園での子どもたちへの配慮、職員の感染防止…。さまざまなことを考え、やり取りしながら今日を迎えています。

2020年度前半の行事も多くは中止になりました。でも年長児のキャンプは日帰り（朝から夜8時まで遊び、キャンプファイヤーもしました）で行い、運動会も3歳、4歳、5歳児は入れ替え制で行います。保護者には、いつもおたよりで、国が言っている“新しい生活様式”では、保育はできないと訴えています。人との関り、肌のぬくもり、顔と顔を合わせて、目を見て話すこと、だっこすること、いっしょにご飯を食べること、いっしょに歌を歌うこと…新しい生活様式ではできないことだらけです。子どもと子ども、子どもと先生、いろんな人間関係を学んでいく大切なこの時期に、コロナはどんな影響をもたらすのか心配です。



2020年9月、コロナという大きな、共通の不安の中、子どもたちと保護者と私たちといっしょに進んでいる気がします。この時期をプラスに変えて、これからの二宮保育園の保育をつくり上げていきたいと思っています。

今はまだ地域に目を向けることはできませんが、これから子どもにとって、保護者にとって、地域にとって、何が必要とされ、何が大切なのかを職員みんなで考えながら、3年目4年目をつくっていききたいと思っています。

二宮保育園 園長 馬場一郎



1996年10月に神戸市中央区でオープンした「真愛ホーム」は、神戸市から賀川先生の精神を持って高齢者のために仕事をしてほしいという要請により、事業が開始されました。その後、介護保険制度に移行した時点で総称を「神戸高齢者総合ケアセンター真愛」と改め、現在まで運営してきました。真愛は、賀川先生の精神を継承し、先生がもし今に生きておられたらどのような働きをされるのか。また、課題を持った人、厳しい状況にある人、悩みを持っている人に寄り添い、共に生きるということを大切にしている高齢者総合ケアセンターとして、中央区を中心に兵庫区においても、在宅及び入所サービスの事業を一体的に運営し、地域社会を意識した取り組みを行って参りました。

そして、2020年6月には、兵庫区荒田町に5ヶ所目の特別養護老人ホームとなる定員110名の真愛あらたホームを開設致しました。既に9月末には満床となり、待機をお願いする入居者も60数名を数えるに至りました。また、区内には賀川先生生誕の地を示す石碑もあります。



社会福祉法人イエス団 真愛あらたホーム竣工式

2020年(令和2年)5月28日

現在、厚生労働省は、高齢者の増加に伴う介護保険財政の逼迫や介護ニーズの多様化を受けて、地域の実情に応じた介護サービスの提供を目的に、2025年までに地域包括ケアシステムの構築を目指しています。神戸市も厚生労働省の方針を受け、医療や介護が必要な状態になっても、可能な限り住み慣れた地域で安心して生活を継続し、その地域で人生の最期を迎えることができる環境を整備することを喫緊の課題として捉え、地域包括ケアシステムの構築が進められています。この地域包括ケアシステムの構築を進める上で、要介護高齢

者の生活の場とされる特別養護老人ホームの役割は、「社会化・地域化」が重要な課題であると指摘されてきました。そこで、私たち真愛は、地域包括ケア推進のための有機的な連携を図る上で拠点となる、特別養護老人ホーム 真愛あらたホームの開設に至りました。

地域包括ケアシステムの構築には、医療機関、介護事業者、民間企業、NPO・ボランティア団体や自治会といった住民組織などの連携が不可欠となりますが、真愛あらたホームの近隣には、神戸大学医学部附属病院、大倉山公園、神戸市立中央図書館、神戸祇園小学校などがあり、地域住民と有機的な連携を図ることが可能な環境が整っています。

さらに、9月には、真愛あらたホームの1階に「あらた診療所」を開院しており、施設の入居者だけではなく、地域住民の方々の診療も開始しています。この「あらた診療所」によって、介護が必要な方だけではなく、全ての世代の方に、真愛あらたホームを認識して頂き、地域住民との関係性を築くことに繋げていきたいと考えます。



あらた診療所受付

また、真愛あらたホームは、災害時には「基幹福祉避難所」の機能を持ち、平時には要援護者の見守り支援の拠点となる「要援護者支援センター」の指定を神戸市から受けています。「基幹福祉避難所」とは、神戸市独自の制度であり、災害発生時、高齢者や障がいのある方が一般の避難所に避難した後、区役所の保健班が、介護などの支援が早期に必要と判断した方の受入れ先となる避難所です。災害時・緊急時には、傍にいて「避難支援できる人」の存在が多くあるほど、より重層化した強力な避難支援に繋がります。従って、地域で暮らす要援護者をその地域全体で支える為には、地域住民との連携が不可欠となります。まずは、「真愛あらたホームは要援護者支援センターでもあり、災害時には『基幹福祉避難所』を開設する。」という事を地域の皆様に広く知っていただく取り組みを進めていきたいと思ひます。

コロナ禍の最中、地域との連携をどのような形で進めていくのか、非常に困難な状況にありますが、真愛のこれまでの実績とネットワークを効果的に活用し、地域住民との関係構築に向けて取り組んで参ります。そして、社会福祉法人として、地域福祉の推進の為、真愛あらたホームが介護・医療・福祉に関する総合的窓口となり、地域福祉ネットワークの拠点となることを目指して邁進していきたく思ひます。

真愛あらたホーム 施設長 松浦 慎介

J. B. フェローズ活動報告

兵庫ブロック

①ブロック交流会

今年度は中止としました。昨年度から始めた園紹介を継続して行い、施設を超えて関係を築いていきたいと考えます。

②施設訪問研修

今年度は中止としました。二宮保育園、のぞみ保育園が、来年度 5、6 月に開催予定です。

③給食室研修

今年度は中止としました。来年度の担当の園については、次回の会議で決める予定です。

④東日本復興支援 T シャツ・ポロシャツ・パーカー・トレーナー申し込みについて

T シャツは毎年新色を出していましたが、今年度は昨年度に販売していた色のみとしました。

⑤長島愛生園・豊島

それぞれ研修は中止ですが、情報交換はしていきます。

今年度は交流会も中止になり、顔を合わせる時がありませんでした。各施設で、「コロナ禍での私たちの保育」をテーマにまとめて冊子にし、情報交換をしました。共有することによって様々な工夫の仕方を知り、この状況に置かれている今だからこそできることがたくさんありました。試行錯誤しながらの日々ですが、交流できる時を楽しみにして過ごしていきたいと思います。離れていても繋がりを大切にできるように活動していきたいです。

報告：兵庫ブロックリーダー
のぞみ保育園 篠田 有記

京都ブロック

2020 年度の JB フェローズ京都ブロックの活動は、①「発達障がいに関する意見交換会」、②「給食に関する意見交換会」、③「豊島研修」「長島愛生園研修」、④「京都ブロック大集会」の 4 つの活動を予定していましたがコロナ対策の為、中止しました。代わりに「オンラインバザー」を行います。

①「発達障がいに関する意見交換会」

次年度も引き続き各施設から事例を持ち寄り、情報を共有し、より良い関わりを考える場にしていこうと考えています。

②「給食に関する意見交換会」

年 3 回各施設の調理職員が集まり、献立作り・レシピ・提供する器・食育の評価等の情報交換や意見交換をしています。

③「豊島研修」「長島愛生園研修」

「豊島研修」は継続して行ってきた企画です。豊島の方々、各ブロックの方々の御協力を頂きながら続けてきました。「みんなのレモン」は 6 年目になりました。今後も繋がりを大切に今、出来る事考え継続していきたいです。「長島愛生園研修」では、資料館の見学、当事者の方の体験談、当事者の方々と困るでの懇親会を通じてハンセン病問題が理解出来る貴重な機会となっていました。これからも継続して研修等を行って行きたいと考えています。

④「JBF 京都交流会」

「イエス団 110 周年記念大会」でより多くのイエス団職員が集い、

「MS2009」の実現や思いの共有が出来、その思いを継続し、形にしていけるように京都ブロックでは「JBF 京都交流会」を行っていきたいと思っています。

2020 年度は、コロナの影響で JB フェローズの活動は行っていません。と言うよりもコロナを理由に行わなかったように思います。JBF は、元々 100 周年記念大会で普段集まらないイエス団職員が集まり、いろんな職員がいる中で補い合い、協力し合い、成長できる…そんなつながりを大切にしたい！そんな思いから生まれました。しかし、今年度はコロナを言い訳に活動しなかったように感じ、自分自身反省しています。

研修を継続していく中で学ぶことが沢山ありました。これからは今まで研修に関わって協力して下さった方々、地域の方々、参加して下さい下さった各施設の職員の方々との間で研修を超えた協力関係や人間関係をより大切にし、どんな時も止める事より続ける方法を考え活動していきたいと思っています。

報告：京都ブロックリーダー
宇山光の子保育園 荒木 健

大阪ブロック

今年度は、コロナ禍ということもあり、昨年度より予定していた大阪ブロックの全体会や施設交流会が中止となってしまいました。JB フェローズの仲間達が集まることが出来ず、本当に残念な思いをしております。しかし、今年度はコロナ禍ではありますが、JB フェローズ大阪職員通信 Vol. 20 を発行し、施設の活動報告をしてまいりました。この施設も、密を避けなければならないため例年のようにはいかないことがありましたが、行事や取り組みを工夫し活動しております。全ては施設を利用する人たち、子ども達のためにキリスト教の精神のもと一人ひとり信念をもって職務にあたっています。

また、大阪ブロックでは今年も復興支援靴下の販売を予定しております。今年は靴下の売り上げを医療従事者の方に支援できればと思っていますので、たくさんの方に想いが届いてほしいと思っています。

大阪ブロックとして集まることが出来ない状況ではありますが、連携を取り合い、結束をなくさず、出来ることをみんなで考えコロナに負けず取り組んでいきたいと思っています。

報告：大阪ブロックリーダー
天使保育園 大田 勲

四国ブロック

今年はコロナウィルスの影響で、JB 担当者たちの顔合わせもままならない状況でした。今年の活動としては、例年通りの翌年の作品カレンダーを製作して各施設で送り合い、実際に飾っているところを写真に撮って交換し合うということをしました。また、会議を開くことが出来なかった為、ZOOM 会議を実施して顔合わせを行いました。実際に集まることは叶いませでしたが、画面越しに JB の担当者同士が顔を見ながら会議出来たことは有意義でした。

ZOOM 会議では、各施設のコロナ対策や、コロナ禍で起きた変化等の話をし、お互いにこの状況を乗り切れるようにエールを送り合いました。例年と違い、コロナ禍で様々なことがままならない中ですが、出来ることを模索して協力していくことの大切さを学ぶことが出来たと思います。今後もこの状況がいつまで続くか分かりませんが、出来ることを協力しながら実施していければと考えています。

報告：四国ブロックリーダー
神愛館 村上 里沙

賀川豊彦献身 110 年記念『イエス団大集会』



日 時：2020 年 2 月 1 日（土）13：00－19：30

場 所：コープこうべ生活文化センター

第 1 部 13:00-17:00 記念礼拝、永年勤続表彰
MS2009 の取り組み(2009～2019)

第 2 部 17:30-19:30 懇親会
JB フェローズの活動報告

賀川豊彦献身 110 年記念「イエス団大集会」の開催にあたり多くの方々にご理解とご協力を頂きありがとうございます。思いもよらないコロナ禍の中、開催できたことは、本当に感謝です。

2010 年 1 月 30 日におこなわれた「賀川豊彦献身 100 年記念事業～イエス団大集会」を機に『ミッションステートメント 2009』が策定され、10 年が経ちました。今回の賀川豊彦献身 110 年記念「イエス団大集会」では、テーマを「MS2009 私たちの取り組み」にしました。

第 1 部では、永年勤続者の表彰を行い、今までイエス団を長年、支えて下さった職員の方々に感謝しました。それにより、これから先を担っていく私たちの意識を高めることが出来ました。



次に、イエス団の掲げる「ミッションステートメント 2009」のもと、各施設の取り組みを報告しました。実際に現場で働



いている方々の生の声、取り組みや課題を聞き、アンケートでも今後の活動に活かしていこうという声が多く寄せられていました。

多くの職員の前での発表は、とてもいい機会になったと思いました。



第 2 部では、「賀川豊彦献身 100 年記念事業～イエス団大集会」を機に始まった JB フェローズの 10 年間の活動を報告させて頂きました。



イエス団職員の繋がりを大切に、自らの意思で学ぶことを目標に、10 年間活動してきました。JB フェローズ全体としては、長島愛生園のハンセン病研修、豊島研修の報告。伝える場として、そして振り返り、考えなおす場としてとてもいい機会になったと思いました。しかし、これは賀川



豊彦献身 110 年記念「イエス団大集会」を開催する為に行っただけではなく、ここから又、新たにスタートする



きっかけであり、100 年後につながる通過点なのです。

100 年後、賀川豊彦献身 110 年記念「イエス団大集会」があったからこそ、『イエス団がよりよい法人になった』と感じてもらえるよう、これからの一日一日を歩んでいきたいとします。

賀川豊彦献身 110 年記念イエス団大集会実行委員会
委員長 荒木 健（宇山光の子保育園）

イエス団の輪っ

「イエス団の輪っ」と題してリレー形式での投稿です。理事・評議員から一人、一般職員は、各ブロックより一人ずつ寄稿して頂きます。

10 回目は、理事の中野敬一さんから、理事の平田義さん。大阪ブロック：和田勉さん(天使ベビーセンター)から宮内未来さん(ガーデン天使)。兵庫・東兵庫ブロック：大本錦さん(甲子園二葉幼稚園)から山田千冬さん(一麦保育園)。京都ブロック：出口剛史さん(あいりん)から南美穂子さん(ぶどうの木保育園)。四国ブロック：秋山礼子さん(瞳保育所)から小川智子さん(光の子保育園)です。



社会福祉法人・学校法人イエス団理事
愛隣デイサービスセンター所長
空の鳥幼児園園長
ひらた 義さん
平田 義さん

「社会をつくりだすミッション」

イエス団の職員である私が理事・評議員の方のリレー原稿を執筆することに躊躇もありますが、中野敬一理事からのご指名でもありますので、お受けさせてさせていただきます。

私たちの法人イエス団では、2009 年に「ミッションステイトメント」を策定しました。特にこだわった部分は、「社会をつくりだす」というところです。いのちを大切に「します」とか、隣人と共に「生きます」といった、自分たちが「します」ということの実践だけではなく、私たちが「社会をつくりだす」ということを掲げるようにしました。

今の社会がどのような状況になっているかを見極め、宣言文で掲げた内容の社会をつくりだすために自分たちが何が出来るか、施設として何ができるか、地域と共に何ができるかを考えていこうということです。

「社会をつくりだす」ために必要なことの一つは「気づき」です。私たちは、いろいろな人たちと出会いますが、その人の痛み、苦しみ、その人の置かれている状況はどうなのだろうとかなどに気づくことができるかできないか、しっかりとアンテナをはって気づかなければなりません。この社会が今、どうなっているのかということ気づくには、いろいろなことを「知る」ということも、「出会う」ということも大切になります。「出会い」によって「気づく」ことはたくさんあるのです。その出会いのために自分から出て行かないと出会うことはできません。福祉の仕事をする中で、私たちは自分のところで出会っている人たちで精一杯になってしまっています。しかし、もう一歩外に出ることによって、地域の中のいろいろな人と出会ったり、新しいことに気づくことができます。

特に、苦しい状況にある人、生きづらさを抱えている人たちと出会い、その人たちの痛み思いを寄せていくことが大切なことだと思います。福祉の現場ではそのような方々と日々出会っていますが、それは仕事としてその人たちに寄り添っていくってことなのか、それとも生き方としてその人たちの生きづらさを自分たちの痛みの方

に感じているのか、このことが私は問われていると思うんです。

コロナ禍の状況下で、私たちを含めて多くの方々が苦しい思いを強いられています。新しい生活スタイルが推奨されていますが、「濃厚接触を避ける」という生活様式を守ることが求められていることに対して、この社会には「濃厚に触れられること」が無くなれば、生きていけない人たちがいるということに気づき、発信していくことが大切だと感じています。生活していく上で常に介護が必要な高齢者や障がい者、乳幼児、病気の方などがそうです。一人で食べることができない方、一人で入浴できない方、一人で排泄できない方、一人で移動できない方々にとれば、「濃厚に触れられなければ」支援してもらうことはできません。このコロナウイルス禍の状況下でも、支援が必要な方は、変わらず支援が必要なのです。そればかりか、世の中がコロナ一色に染まり、日常生活において様々な制約が課せられる事態の中では、より一層のきめの細かい支援が必要となってくることも見落とさないで欲しいと思います。

あと、アメリカでは、コロナ感染者の重症患者の人工呼吸器の不足により、医療スタッフの判断で患者の選別(トリアージ)が行われ、重度障がい者の人工呼吸器を外して、より若く治療効果のある人に付け直すという恐ろしい事態が起きました。日本ではそのようなことは起こっていません。

しかし、2016 年 7 月 26 日には、相模原事件が起きています。犯人は重度の障がいのある方を選別して、19 名の命を奪いました。裁判で死刑の判決がなされ、被告が控訴しないことにより、この事件が終わったとされてます。日本の社会が重い障がいのある方の命の問題、社会に蔓延る優生思想の問題を考える機会が失われつつあると感じています。このような社会の状況下で、コロナ感染による重症患者が増えていき、日本でもトリアージの課題に向き合わざるを得なくなった時に、障がいのある方々のことを思い浮かべて欲しいと思います。コロナ禍の状況だからこそ、多様な生き方を認め合うことができる世の中になっていくことを願っています。

最後ですが、「平和でなければ福祉はできない」と思っています。今の社会は、本当に平和な社会と言えるのでしょうか。戦後 75 年という節目の年に、私は日本のあり方が、この年に、何か大きなことが変わっていく節目にならないかということを危惧しています。憲法改定や、集団的自衛権、沖縄辺野古の新基地建設などについても、私たちは注視していかないと、もう後戻りができない状況になりかねません。障がい者の人たちは、あの戦時中に、穀つぶしと言われ、生産性のない、役に立たない者と言われたのです。ナチスドイツの時代には、優生思想のもとでガス室送りにさせられていった障がい者の人たちの命を奪われていったのです。

今、社会の中で、弱くさせられている人たちの命が蔑ろにされることなく、そのような方々の命こそが大切にされる社会をつくりだすために共にがんばりましょう。

次号のバトンは、叶 信治評議員にお願いしたいと思います。

us band





京都ブロック ぶどうの木保育園 みなみほこ 南 美穂子さん

「キリスト教保育と私」

この度、京都市南部障がい地域生活支援センター「あいりん」からバトンを受け取りました、ぶどうの木保育園の南 美穂子です。この機会にこれまでを振り返り、今思っていることを綴らせていただけたらと思います。

ぶどうの木保育園との出会いは、保育実習の時でした。慣れない保育の現場、帰宅すれば記録に追われ実習をこなすだけで精一杯でしたが、園舎に入ると温かさや、受け入れ、包まれているというような感覚になり、通うことが楽しく、心地よく感じられた記憶があります。それから保育士として勤め14年。“ぶどうの木”というのは聖書の中にあることを、園長の耕先生が卒園式で子どもたち、保護者の方に話しています。私もその幹に繋がる一人として、これまで関わらせてもらった子どもたち、保護者の方々、仲間の先生方に支えられてきた繋がりに感謝の思いで日々過ごしています。

私にとってクリスマスと言えばケーキを食べたり、プレゼントをもらったり、大切な人と過ごす日と思っていました。しかし、保育園に勤め、初めて迎えたクリスマス。5歳児が主になり、全園児で創り上げる降誕劇を通して、本当の意味を教えてもらいました。小さい頃から保育園のクリスマスを過ごし積み重ねてきた子どもたちから、染み出るようなセリフや歌声、心を込めて演じる姿からイエス様の降誕の意味がスーッと心に入ってきたことを今でも覚えています。それから保育の中で子どもたちと賛美歌を歌い、祈りを捧げる中で神様の大きな愛に包まれ、いつもそばで見守ってくださっていることを覚え感じながら過ごしてきました。また礼拝で聖書のお話を聞き、弱く辛い立場にいる人々にいつも寄り添われていたイエス様の事を知り、子どもたちや保護者の方と心を通い合わせ、嬉しい時や悲しい時、困った時も共感でき、一番身近でいられる保育士でありたいと思い“寄り添い”をキーワードに日々過ごしてきました。

しかし、最近その難しさを痛感する時を与えられました。昨年一児の母となり、初めての子育てを経験しています。保育士だから…と知識や経験、体力が少しでも役立つのではと思っていましたが実際は想像とかけ離れ、産後は心身ともに疲弊してしまい、まだ産まれて数日の我が子を腕に抱いたまま朝を迎えた事もありました。今となれば何でもないことが風船のように不安が膨らみ、はじけそうになるくらい悩んでしまうこともありました。よく言われる育児書通りにはいかない子育てを通して想像が及ばないこと、当事者になってみないとわからないこともあるという事を思い知らされました。今までの自分を振り返ると様々な状況の中、日々仕事をし、子育てされている保護者の方にどのような言葉をかけ、どれだけ思いを寄せることが出来ていたのだろうか…。力不足な部分に気付き反省する時でした。また、中には同じように経験できないこともあります。豪雨災害により家が浸水し、泥まみれになりながら「これからどうしよう」とつぶやかれた言葉の重み、基地があることで恐怖と隣り合わせで生活されている沖縄の人々、自然が壊され、棲む場所が奪われている生き物…。自分の経験になく、想像を越える状況に遭われている方々にどれだけ寄り添うことが出来るのかという大きな課題も同時に与えられたように思います。

キリスト教保育に携わる保育士として反省と実践を繰り返す中、神様の愛に包まれながら子どもたちや保護者の方、仲間の職員と共に育ち合い成長させていただいていることに感謝し、これからも

一人ひとりへの“寄り添い”に丁寧に心を尽くしながら保育に励んでいきたいと思っています。最後になりましたが、コロナ禍で感染対策に気が抜けない状況ではありますが、子どもたちの豊かな育ちと皆様の健康が守られますようお祈りします。次回の「イエス団の輪」は、くずは光の子保育園にお願いしたいと思っています。よろしくお願いします。



四国ブロック 光の子保育園 おがねともこ 小川智子さん

「常に感謝の気持ちを…」

私がイエス団の一員、光の子保育園でお世話になり、16年になりました。生まれ育った町内にある保育園で、子どもの時、前の道を通って園舎を眺めた事のある保育園に導かれたのは、何かのご縁だったんだなと思っています。今回、イエス団に連なる一人としての思いをじっくりと考えてみて、この16年を振り返り、これからの自分のあり方を考える良い機会となりました。

私とキリスト教との関わりは就職してからです。初めて教会に行き、礼拝に参加した時の事を思い出しました。ステンドグラスの美しさ、現イエス団理事長である、黒田道郎牧師先生の優しい口調での聖書のお話、初めて聴いたオルガンの音色、みんなで歌った讃美歌…どれも初めての事で、終始ドキドキしながらも何だか心が落ち着く空間…そんな感じがしました。

就職して2年目からは、年に1度程度ではありますが、職員が順番に奏楽の奉仕をさせて頂いています。毎回とても緊張します。私の奏楽で教会員の方が少しでも歌いやすいようにと心掛け、練習していると園長先生が励ましに来て下さった事もありました。つたない奏楽ではありますが、精一杯頑張らせて頂いています。当日は、先輩や同僚の先生も応援しに来て下さったりもします。奏楽を弾き終え、ほっとしている私に、道郎先生、教会員の方は必ず「お世話になりました。ありがとうございます、上手でしたよ。歌いやすかったですよ。」と優しいお言葉をかけて下さるのが本当に嬉しいです。

保育園にも週に1度、礼拝の時間があり、道郎先生が園の前にある教会から聖書のお話をしに来て下さいます。子ども達は、道郎先生に会えるのを楽しみにしています。礼拝では、毎月、子ども讃美歌が変わります。大きいクラスを担当させて頂いている時は、子ども達と歌うだけでなく、どんな意味なのか等、歌詞を丁寧に伝えていけるよう心掛けています。子ども讃美歌の中には素敵な言葉や、大人の私達も忘れてはいけない思いを、思い出させてくれるような歌詞が沢山あります。その中でも、“ありがとう”や“感謝”という言葉や思いが、私は生きていく上で一番大切な事だと思っています。

今年は、コロナウィルス流行により、バス遠足や夏祭り、バザー等中止になったり、運動会も短縮したりと、園での過ごし方が、がらりと変わりました。何気ない日常が、普通に出来ることが、どんなに幸せだったのか、感謝しなければいけなかったのかを改めて気付かされました。

光の子保育園での16年は、決して楽しいことばかりではありませんでした。でも、こうして長い間、同じ場所で頑張ってきたのは、沢山の素敵な人達に出会い、元気や優しさをもらい、支えてもらったお陰です。本当に私は、人に恵まれているなと思います。私の誇りです。感謝しています。

私は、誰に対しても、何事に対しても“ありがとう”と素直に言える、思える保育者、人間でいたい。この気持ちを持っていれば、MS2009、全ての項目を大切に出来るのではないかと私は思います。

そして、子ども達にも感謝する事の大切さを伝えていけるよう、日々、過ごしていきたいと思います。

今回の「イエス団の輪」は、神愛館さん、よろしくお願い致します。



兵庫・東兵庫ブロック 一麦保育園 やまがふゆ 山田千冬さん

「私の生きがい」

今年全世界で新型コロナウイルスが流行し、不安と緊張の生活を強いられ、私たちの生活や今まで当たり前だった日常が、当たり前ではなくなった年となりました。1年前に、翌年このような生活を送ることになるとは、誰が予想したでしょうか。

私には、30年以上続けている趣味があります。中学生の時に吹奏楽部に入部して以来、クラリネットは常に私の生活の一部でした。汗と涙と笑顔で過ごした青春時代の思い出は、大人になっても吹奏楽を続けたい！と思うほど、充分魅力的なものでした。社会人になり就職した年に、アマチュア吹奏楽団に入り現在に至ります。学生時代のOB・OG10数人で創団した楽団（現在は60名ほど）が、20年以上も存続するとは、当時は想像すらしていませんでしたが、地元西宮で多くの方々に支えられながら活動を続けてきました。「3度の飯よりも好き！」と言えば大袈裟に聞こえるかもしれませんが、仲間と創り上げる音楽の時間は、私にとって明日への活力が与えられるものであり、日常に当たり前存在していたのです。

3月1日に兵庫県で新型コロナウイルスの感染者が出て以来、楽団は活動自粛に入りました。7ヶ月たった現在（10月末）も活動は再開していません。これほど長い期間、私の生活から音楽が離れたのは初めてでした。「人は何かを失って、初めてその大切さに気づく」と言いますが本当にその通りで、毎週仲間と浸れる音楽の時間は、得難い時間だったことを改めて痛感させられました。活動自粛期間中、リモート合奏の試みもありました。各自が演奏・録画したものが編集され、参加者全員での合奏シーンの出来上がりを見た時は、懐かしさと共に嬉しさがこみ上げてきました。離れていても、一緒に音楽ができる新しい試みは、コロナ禍でなければできない貴重な経験でした。

私は時々、音楽の世界と保育の世界が似ていると感じる時があります。保育園には、保育士の他に、栄養士、調理師、事務員がいて、各自が責任を持って自分に与えられた役割を担っています。それをまとめるのは園長だったり主任だったり。吹奏楽の世界で、個性豊かな、様々な楽器を操る指揮者というところでしょうか。年齢、経験、保育観の異なる者同士が、自分の考えを持ち、同僚の意見に耳を傾けながら、目の前の子ども、保護者のために、より良い保育を行うためには？ということを日々考えながら邁進しています。（しているはずです。）

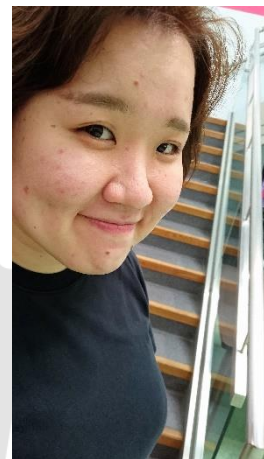
音楽も、様々な価値観の人が集まり、一つの音楽を創る過程では、意見のぶつかり合いや、指揮者と演奏者との間にちょっとしたズレ等も生じることがあります。それでも、みんなが思う気持ちは「より良い音楽を奏でたい！」という共通の想いなのです。メロディを奏でるパート、伴奏を奏でるパート、打ち込みパートや、キラキラとした装飾的な音符を担当するパート、それぞれが大切な役割を担っています。

保育も音楽も1人ではできません。形の異なるピースが1つでも欠けたらジグソーパズルが仕上がらないのと同じで、仲間や同僚がいてこそ、たくさんの発見や学び、喜びがあります。「私たちは違いを認め合える社会を作り出す」で掲げられているのは、そういう意味も含まれているのかな？と思います。

まだまだ、コロナ禍で不安な毎日ではありますが、1日でも早く、

保育も音楽も安心して心から楽しめる日々が戻ることを、心から願っています。

次号は、二宮保育園さんにバトンを繋ぎたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



大阪ブロック ガーデン天使 みやうちみき 宮内未来さん

「桜梅桃李」

天使ベビーセンターからバトンを受け取りましたガーデン天使の宮内未来です。介護を始めて9年目、ガーデン天使でお世話になり5年目となりました。直接にきた時にみなさん目を見てしっかり挨拶してくださり、雰囲気の良い施設だと思わずに「ここがいい！」と後先何も考えず迷いもなく決めました。

キリスト教と関わりがない環境で育ちましたが、イエス団の理念や活動を知っていく中で、こちらの法人ではJBフェローズの先生方との交流や会議、外部研修など参加させていただける機会が多く設けられており色々な事を学ばせていただき自分自身のスキルアップになり、とても感謝しております。

私はミッションステートメント 2009 の「わたしたちは、違いを認め合える社会をつくりだす」に基づき働いています。

ガーデン天使に入職当時、誰の考えに対しても「そうですね、そうですね」と頷いてばかりで自分の考えも主張できず、自分に自信が持てず、20歳代も少なくなかなか先輩方とコミュニケーションをどう取ればいいのかと悩んだこともありました。施設内の異動があるなかで、ありのままの自分を認めていくことから始めようと思えました。

他人との比較の中で「自分」の立ち位置を確認していると思います。「人と比べる必要なんかない」ってよく聞きますが、他の人がいるからこそ自分の得意なことや苦手なものがわかって「自分を知る」ことができて、そう考えれば人と比べること自体ネガティブなことではないと思うようになりました。介護に関わらず色々な考え方をもっている方がおられ、意見が合わないことが多いと思いますが、必要になってくるのは、たくさんある選択肢の中から「自分はこれ！」と選べる価値判断の「軸」を持てるかどうかだと思います。もし自分の選択が失敗だったとしても、その時点から失敗を「意味があるもの」へ巻き返していけるように自分の違いを認め、失敗を成長と考えていくようにしています。また私は人それぞれを「桜梅桃李」にたとえています。桜は桜、梅は梅、桃は桃…と一つ一つ形も色も違うけれど満開の花を咲かせます。明るい性格の人がいれば、落ち着いた性格の人がいるように本当に人もそれぞれ違うし、みんなが明るい花である必要もないと思います。咲く時期がバラバラですが今は自分に自信が持てなくても「開花」する時がいつか訪れるので、焦ることなく自分を大切に、一人ひとりが違いを認め、思いやる心をもてるような環境づくりをしていこうと思います。生きていくなかでいいことばかりが続くわけでもなく、嫌なことも辛いこともあります。働く中で入居者さんから笑顔や労いの言葉を頂きます。人と関わる仕事をする中で「ありがとう」という言葉は本当にうれしいものです。日々、何事にも感謝し笑顔を忘れず、元気を与える存在になれるようにこれからもいろんなことにチャレンジし頑張っていきたいと思います。

次のバトンは馬見労働保育園さんよろしくお願い致します！

表紙写真の解説



写真上から①～⑥の順

- ① 神戸市立小学校の4年生の副読本に賀川豊彦の活動が掲載され、賀川記念館に学習に来られています。
賀川記念館
- ② 一泊キャンプ 沢あそび
みどり野保育園
- ③ 恒例の天使保育園児たちとの交流会です。このひと時はとても優しさ溢れた時間です。
ガーデン天使
- ④ 子育て支援センター事業 0歳、1歳児の親子ふれあいあそび
二宮児童館
- ⑤ 1歳になったばかりの子どもたちと高齢のウサギびっぴ。びっぴは10年以上にわたって園の子どもたちと生活を共にしてきましたが、この写真が撮られた1週間後召天。びっぴとともに過ごした子どもたちは健やかに成長しています。
一麦保育園
- ⑥ クリスマス音楽会 地域の方と親子で集まって、楽しい時間
友愛館

編集後記

昨年の今頃は、世の中がこんなことになるとうとは、誰が想像できたでしょう。中国武漢で発生し、対岸の火事と思っていた人も少なくないでしょうが、瞬く間に世界に猛威を振るっていった新型コロナウイルス感染症。本来なら2020年は東京オリンピック・パラリンピックで盛り上がり、普段通りの生活、普段通りの年末年始を過ごせていたはずが…。新しい生活様式、ソーシャルディスタンス、3密、緊急事態宣言、外出自粛要請。それらは私達の生活も仕事も一変させるものでした。私たち福祉、教育の仕事はソーシャルディスタンスを保つことは困難であり、現場は混乱を余儀なくされました。利用者やそのご家族、職員、一人ひとりの健康と安全安心を守りつつ、様々な知恵を絞ってこのコロナ禍に立ち向かいました。しかし、マイナスな面だけではなかったと思います。利用者を真ん中に置いて、本当に必要なことは何か。できないことが増えたのなら、今できることは何か。仕える事を見直すには大変良い機会が与えられたと思います。まだ収束は先ですが、来年の今頃はきっと、私たちの新たな働きが定着し、よりよい社会がつくりだされていることを信じて、今はじっと耐え、知恵を絞っていきたいと思います。111年前の今日、賀川豊彦が様々な困難に立ち向かい始めた創立記念の日を覚え、イエス団報24号を発行できましたこと、神さまの導きと皆様のご協力に感謝いたします。



様々な啓発ポスターが出されていますよね。押し付けではない言い回しに共感しましたので、ご参考までに。

新型コロナウイルス感染予防対策ポスター
無料ダウンロード

<https://dressers.work/apps/note/?p=328>

DRESSERS

デザイナー&コピーライターによるデザインカンパニー

STAFF ブログ「D-talks」より



イエス団報編集委員会